みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

「奄美大島の八月踊り」について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-04-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 笹原, 亮二 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00009050

Ⅱ．「奄美大島の八月踊り」について

笹原亮二

1．はじめに

奄美大島・加計呂麻島・喜界島・徳之島の奄美群島北部に伝わる八月踊りは、これらの地域以外ではほとんども見られない奄美独特の芸能です。私たち国立民族学博物館は、平成16年(2004)から平成17年(2005)にかけて奄美大島で八月踊りの映像取材を行い、映像番組「奄美大島の八月踊り」を製作しました。今日、皆さんにこの番組を見ていただくにあたり、私たちがどのような考えに基づき、どのような意図をもって映像取材や番組制作を行ったかについてお話ししてみたいと思います。

2．八月踊りとは？

八月踊りは、奄美大島・加計呂麻島・喜界島・徳之島、あるいはそれぞれの島内においても様々な違いがあることが従来から指摘されてきました。私たちが映像取材を行うといっても、全ての踊りを対象とするわけにはいきませんので、どの地域のどの踊りに対象を絞ればいいかということが、大きな問題として浮上してきました。それは、言い換えれば、私たちが八月踊りを差し当たりどのように理解するかということになります。

そこで先ず、私たちが、従来の研究者の八月踊りに対する理解を踏まえて、八月踊りをどのように理解するに至ったかについて、述べたいと思います。

八月踊りはこれまで多くの研究者に注目され、論じられてきました。民俗学や民俗芸能研究の観点からは、旧暦８月[1]のアラセツ・シバサシ・ドンガという「み八月」の時期に、各「シマ」[2]の人々によって踊られるという、八月踊りの年中行事的性格に注目した小野重朗さん(小野 1995:257-268)、そうした年中行事的性格に加えて、テンポ・アップしていく踊り方や歌掛けといった芸態的な特徴に注目した三隅治雄さん(三隅 1976:95-107)、み八月や盆に火伏せと豊年祭とを兼ねて踊られるほか、疫気祓いとして家々を巡って踊られる年中行事的・儀礼的性格と共に、独特の太鼓を用い、踊り手が歌いながら集団で輪になって踊るという、三隅さん以上に芸態に注目した本田安次さん(本田 1991:131-148)などがいます。

しかし、民俗学や民俗芸能研究の研究者以上に八月踊りに関心を寄せて論じてきたのは、民俗音楽学の研究者です。

小川学夫さんは、八月踊りは奄美のみ八月行事として各シマで盛大に踊られる踊りで、家々を回ったり「ミヤ」など特定の場所で踊ったりと踊り方には地域差があるが、何れも踊り手即歌い手で、その中の何人かが「チヂン」と呼ばれる独特の太鼓を打つという踊り・歌・太鼓の「三位一体の原則」によって、男女に分かれたグループが交互に歌を掛け合う歌掛けが行われ、多いところでは40以上の演目が伝わっているとしています(小川 1979・1989)。

松原武実さんは、八月踊りは奄美大島と喜界島と徳之島３島に見られ、男女に分かれて円陣を作り、歌や踊りを相互に掛けあうのが共通の基本的なスタイルとなっているが、太鼓の打ち手や歌い出しが男だったり女だったり場所によって一様ではないと、地域的な多

様性を強調しています(松原 1993)。

内田るり子さんは、八月踊りは奄美諸島に広く分布する民俗舞踊で、季節の折目にシマの人々が豊年の感謝や祈願として、踊り手自ら演奏する太鼓と集団的な男女掛け合いの歌を伴奏に、シマの聖地や広場や家々を巡って踊られ、踊りの動作は何らかの意味を表す「あて振り」ではない「集団的象徴舞踊」であるとしています(内田 1981:1)。

今回の映像取材や番組制作を指導していただき、この会場にもいらしている久万田晋さんは、八月踊りは旧暦８月を中心に奄美大島一円で演じられている「集団太鼓踊り芸能」で、シマによって10数曲～40数曲のレパートリーがあると、従来の多くの研究者の様々な理解を踏まえて簡潔に定義しています(久万田 1991:1)。

中原ゆかりさんは、八月踊りは男女が一円を作り、太鼓を伴奏に集団で歌を掛け合いながら歌い踊る芸能で、旧暦８月、年に一度のシマの祭りの中で、シマの人全員が参加して盛大に歌い踊られると、「シマ」との関係を強調した理解を示しています(中原 1997:5)。

こうした八月踊りに対する従来の研究者の理解には、幾つか共通する点が認められます。

先ず１点目は、奄美の地域的な芸能ということです。八月踊りは、上演の機会や踊り方などに場所によって様々な違いがありますが、基本的には奄美以外には見られない奄美独特の芸能というわけです。但し、奄美群島内の八月踊りの分布域の設定は、研究者によって異なりますが、全体的には奄美大島・徳之島・喜界島３島とする理解が優勢です。つまり八月踊りは、奄美群島の北部３島に分布する奄美独特の地域的な芸能というかたちで、従来研究者に理解されてきたといえます。

２点目は、年中行事的な芸能ということです。この点は、アラセツ・シバサシ・ドンガのみ八月を中心に行われる芸能ということで、各研究者の理解はほぼ共通していました。

３点目は、儀礼的な芸能ということです。八月踊りが演じられるみ八月や豊年祭は、何れも儀礼的性格を有する年中行事です。また、「ミャー」と呼ばれるシマの聖地で踊ったり、悪霊祓いや火伏せとして家々や街路を巡って踊ったり、様々な面で信仰的・儀礼的性格を帯びていることが指摘されていました。

４点目は、芸態の特徴です。八月踊りはシマの老若男女全員が参加して行われる集団的な芸能で、踊り手が男女に分かれて輪になり、踊り・歌・太鼓三位一体で行われるとされていました。

５点目は、音楽的特徴です。男女に分かれて行われる歌掛け、歌い出しを務めるリーダー格の男女の存在、チヂンと呼ばれる独特の太鼓の使用、シマによっては40曲以上にも及ぶ演目といった特徴が、特に民俗音楽学の研究者によって指摘されてきました。

こうした共通点の存在は、従来研究者の間では、八月踊りに対する一定の共通理解が形成されてきたことを示しています。しかし、その一方で、細かく見ると、八月踊りの理解に研究者ごとの様々な違いがあったことも否定できません。こうした理解の違い、八月踊りの定義の「ブレ」は、民俗学・民俗芸能研究・民俗音楽学など、研究者の専門の違いが原因と考えることもできます。しかし、松原武実さんが「八月踊といっても一様ではない」と指

摘しているように(松原 1993:49)、各地の八月踊りが実際に相当多様性に富んでいるとすれば、そうした八月踊りの実態に起因する可能性も出てきます。

何れにしても、こうした先行研究における八月踊りの理解のブレに注目するならば、八月踊りという芸能をどのように理解するかを実態に即して考えてみることは、未だに重要性を失っていないといえます。そこで、大方の研究者が八月踊りの分布域と見なしていた奄美大島・徳之島・喜界島３島の八月踊りを、改めて比較してみたいと思います。

３．奄美大島・徳之島・喜界島の八月踊り

（１）奄美大島と徳之島の八月踊り

奄美大島と徳之島の八月踊りは、同系統の芸能として一括りに見る研究者も少なくありませんが、様々な違いも見られます。

踊りの呼称は、奄美大島ではほぼ全域で「八月踊り」と呼ばれているのに対して、徳之島では「八月踊り」のほか、「夏目踊」「浜踊」「折目踊」「千人踊」など、場所によって様々な呼称で呼ばれています。踊る機会は、奄美大島がみ八月が主で、そのほか豊年祭・八月十五夜などにも踊られるのに対して、徳之島では盆の後の初丙から戊の間に行われる「浜下り」や八月十五夜が多くなっています。踊る場所は、奄美大島がシマの広場や聖地、家々の庭なのに対して、徳之島ではシマの広場・聖地・家々のほか、浜でも踊られます。

芸態については、両島共に、踊り・歌・太鼓の三位一体で、男女の歌掛けで行われている点は共通します。踊りの陣形は、両島共に輪踊りですが、奄美大島は円あるいは複数の同心円状なのに対して、徳之島は渦巻き状という違いがあります。歌は、奄美大島では８８８６音の琉歌調の歌詞を掛け合う４句体歌詞で、途中からテンポ・アップするところとしないところとあるのに対して、徳之島では琉歌調の歌詞を掛け合う４句体歌詞のほか、１つの歌詞を男女が８８と８６に分けて掛け合う２句体歌詞もあり、ほとんどの場合途中からテンポ・アップします。歌の音階は、奄美大島が律音階が主なのに対して徳之島は民謡音階が主です。踊りの演目は、両島で一部共通するほか、多くに繋がりが認められます。

（２）奄美大島と喜界島の八月踊り

奄美大島と喜界島では、踊りの呼称は、奄美大島ではほぼ全域で「八月踊り」なのに対して、喜界島では「八月踊り」のほか、「ミヤ踊」「イッソー」とも呼ばれます。踊る機会は、奄美大島ではみ八月・豊年祭・八月十五夜なのに対して、喜界島では「節折目（しちうんみ）」・シバサシ・ドンガ・神社例祭・「浜祝（ふあまゆうぇー）」・八月十五夜・豊年祭など、様々な年中行事の際に行われる「シマ遊び」で踊られます。踊る場所は、奄美大島がシマの広場・聖地・家々なのに対して、喜界島ではシマの広場や聖地のほか、神社の境内や浜でも踊られます。

芸態については、奄美大島では踊り・歌・太鼓の三位一体で、男女の歌掛けで行われるのに対して、喜界島では三位一体と歌掛けを行うのは同じですが、歌も太鼓も踊りも女性が中心で、女性同士で歌掛けが行われ、かつては女性が仮装や覆面をして踊ったといわれて

います。踊りの陣形は、両島共に輪踊りで共通です。歌は、両島共に８８８６音の琉歌調で共通ですが、奄美大島ではテンポ・アップするところとしないところがあるのに対して、喜界島ではあまりテンポ・アップしません。歌の音階は、両島共に律音階で共通です。踊りの演目は、多くが共通するか繋がりが認められますが、喜界島には忠臣蔵の内容を歌い込んだその名もズバリ「忠臣蔵」という演目や、それぞれのシマに独自の演目が見られます。

（３）奄美大島・徳之島・喜界島の八月踊り

奄美大島・徳之島・喜界島の八月踊りを比べてみると、全般的には３島それぞれの違いが目立ちますが、全ての面において３島が違っているわけではありません。

例えば、踊りの演目では、３島それぞれ固有の演目や３島共通の演目がある一方で、２島のみに共通する演目も見られます。その場合、奄美大島・喜界島共通の演目が、奄美大島・徳之島共通の演目よりも多くなっています。歌については、男女それぞれが８８８６音の歌詞を掛け合う奄美大島・喜界島に対して、１つの歌詞を男女で８８と８６に分けて掛け合う徳之島、律音階の奄美大島・喜界島に対して民謡音階の徳之島、歌と踊りが途中からテンポ・アップする奄美大島北部・徳之島に対してテンポ・アップしない奄美大島南部・喜界島といった違いがあります。また、踊りの陣形は、円または同心円を作る奄美大島・喜界島に対して、徳之島は渦巻き状で違っています。

このように３島の八月踊りの違いを整理してみると、奄美大島と徳之島、奄美大島と喜界島では、奄美大島と喜界島のほうが、奄美大島と徳之島よりも等質性が高いことがわかります。それは、奄美大島と徳之島の間には音楽的に１つの断層があり、奄美大島と喜界島は琉歌を律音階で歌っていて最も奄美的であるとする、この地域の歌謡に関する内田るり子さんの見解(内田 1981:36)とも符合し、注目されます。

４．「奄美大島の八月踊り」に焦点を当てる

とはいうものの、やはり奄美大島・徳之島・喜界島３島の違いは大きく、見過ごせません。従来八月踊りの分布域として一括されがちだった奄美大島・徳之島・喜界島においても、先に見たように、それぞれの島や地域間の八月踊りの等質性の度合いの差が存在していました。等質性の度合が最も高かったのは奄美大島北部と南部で、奄美大島と喜界島、奄美大島と徳之島の順に等質性の度合が低くなっていました。

こうした３島間で共通点と相違点が複雑に入り組みつつも、それぞれの島ごとに把握が可能であるという八月踊りの実態は、八月踊りを、「外界との交流と島内での滞留で独自性が歴史的に形成」されてきた「島々の柄」が存在する(笹原 2006:31)という、奄美の文化の地域性の文脈において理解することが可能、あるいは必要であることを示しています。しかも、こうした３島の八月踊りに見られた地域的な特徴は、八月踊りに限らず奄美の音楽全般、更には奄美文化一般にも該当すると、内田るり子さんは指摘しています(内田 1983:186)。そのことも併せて考えると、先ずはそれぞれの島の踊りがどういうものかを、実態に

即して理解を試みることが重要となってきます。

実は、「奄美大島の八月踊り」という今回の私たち民博の八月踊りの映像取材と番組制作のテーマは、こうした検討を経て決定したものです。従って、同系統の踊りが分布する徳之島や喜界島に敢えて手を広げず奄美大島に焦点化するという私たちの姿勢にも、一定の妥当性があると考えています。

そこで次に、奄美大島の八月踊りに焦点を絞った私たちが、実際に映像取材や番組制作を行う際に、従来の研究者の理解を踏まえつつ、どのようなことをポイントとしたかについて述べておきたいと思います。

5．八月踊りの踊り方

先ず私たちがポイントとしたのは、八月踊りの芸態的な特徴、つまり踊り方でした。

八月踊りの歌は、「元歌（もとうた）＋共通歌詞」という構造になっています。演目によって最初に歌われる歌が決まっていて、それを元歌といいます。元歌は八月踊りの演目の数だけあり、シマによって10から40以上に上ります(小川 1974:164)。元歌を歌った後は、700以上あるといわれる共通歌詞(恵原 1982:308)から適当なものを選んで歌い継いでいきます[3]。こうした歌をシマの人々が男女のグループに分かれ、輪になって掛け合いながら、踊り、太鼓を打つという、踊り・歌・太鼓の三位一体で行われます。

男性と女性が交互に歌を掛け合う歌掛けは、八月踊りの最も大きな特徴とされます。歌掛けでは、男女それぞれのグループに「サキダチ」「ウチダシ」などと呼ばれるリーダーがいて、彼らが相手の歌の歌詞に応じて共通歌詞の中から適当な歌詞を選んで歌い出すと、ほかの人々がそれに唱和します。

奄美大島に昔から伝わる歌に「シマウタ」があります。シマウタは、三味線が伴奏で用いられ、男女間や女性同士で、個人対個人で歌掛けが行われるといった八月踊りとの違いがありますが、シマウタも八月踊りも共に歌掛けを基本としていることや、演目や歌詞に共通のものがあることは、両者が基本的に同じ音楽文化に根ざしていることを示しています。

八月踊りでは、歌掛けの際に相手に対して的確に歌を返す即興性が重要視されていて、「歌掛けは勝負」といわれる程です。歌掛けでの相手の歌に対する歌の継ぎ方には、順番が決まった一連の定型的な歌詞を歌い継いでいく「ナガレ」と、相手の歌に応じて共通歌詞から適当な歌詞を選んで歌い継いでいく「ナラベ」の２通りがあります。ナラベには、同系統の事物を歌い継ぐ・相手の歌の内容に対する批評や感想・相手の歌詞の一部を取ったり形式を真似たりするといったやり方があります(小川 1989:177)。

6．奄美大島の八月踊りの違い

奄美大島の北部と南部では、歌の掛け方に違いが見られますが、それに限らず様々な違いが見られるのは先に述べた通りです。そうした奄美大島内の八月踊りの違いも、映像取材や番組制作の際の重要なポイントになりました。

地域ごとの違いとして従来から指摘されてきたのは、南北で明確な様式の違いが見られることです。松原武実さんは、それを、「奄美大島北東部の北部(多声)様式」と「奄美大島西南部の南部(単声)様式」と指摘しました。松原さんによれば、２つの様式の違いは様々な音楽的側面において認められます。北部様式は男女の歌の旋律や音域が異なるのに対して、南部様式は男女の旋律が同じで音域も同じです。歌掛けは、北部様式では男女共に相手の歌に被せて歌い出します。また、次第にテンポ・アップし、途中で曲調を変える場合もあります。それに対し、南部様式では、相手の歌に被せることはなく、テンポ・アップや曲調を変えることもありません。音楽構造としては、北部様式は複雑で南部様式は単純なので、最初に単純な構造の南部様式が奄美大島南西部で発生し、それが北西部に伝わって、複雑な構造の北部様式へと変化したのではないかとしています(松原 1993)。

こうした松原さんの見解に対しては、八月踊りでは同じシマにおいても人によって歌い方に違いが見られること、２つの様式は松原さんが指摘する双方の境界線付近ではっきりと分かれるのではなく、徐々に変わっていくこと、現在も様々なかたちで北部様式の南部への伝播が進行していることを考えると、様式の分布や南部から北部への伝播に伴う様式の変遷といった想定は、ややシンプルすぎて無理があると、久万田晋さんは疑問を呈しています(久万田 1995)。

しかし、奄美大島南部と北部の八月踊りには、松原さんが指摘するような類型的な様式の違いが実際に存在していることも確かです。松原さんの両様式間の伝播や新旧に対する見解の適否はひとまず措いて、両者を地域的な多様性の指標と考えるならば、松原さんの整理にも一定の妥当性が認められるのではないでしょうか。

そこで、改めて北部様式の八月踊りと南部様式の八月踊りについて比べてみると、音楽構造の面以外にも違いが見られることがわかります。上演の機会は、かつては両者共にみ八月、盆の送り、八月十五夜、豊年祭、九月九日などに踊られていましたが、近年は、北部様式ではアラセツとシバサシで、南部様式では豊年祭で踊られる場合が多いという違いが見られます。太鼓の打ち手は、北部様式の女性に対して南部様式は男性です。踊りの次第は、かつては両者共にミャーなどの広場から家々を巡って広場に戻るという順序で共通していましたが、現在は、南部様式の地域においては広場で踊るだけのところが多くなっています。

このように、北部様式と南部様式の八月踊りに様々な面で類型的な違いが見られることは、奄美大島の八月踊りについて、全体的な様相を把握したり様々な問題を発見したりする際に、両者を指標とすることの有効性を示しています。

７．八月踊りの儀礼性

八月踊りが特定の年中行事の際に行われてきたことは、それが単なる娯楽ではなく、ある種の儀礼的性格を帯びていることの現れと考えることができます。そうした八月踊りの儀礼性も、映像取材や番組制作の際のポイントになりました。

八月踊りの最も代表的な上演の機会はみ八月です。み八月は、新しい「節」を迎えての祭りという認識は奄美大島全域でほぼ共通するものの、アラセツは火(日)の神祭り・豊作感謝と祈願・先祖祭り・悪霊祓いなど、シバサシは悪霊祓い・水神の祭り・土の神の祭り・先祖(コーソガナシ)祭りなど、ドンガは先祖祭り・ネズミの祭りなどというように、行事の内容や意味は地域によって様々です(小川 1979:37)。しかし、何れにしても、ある種の儀礼性、信仰的な性格を帯びているという点では変わりません。因みに、奄美大島のアラセツ行事として有名な龍郷町秋名の「ショチョガマ」や「平瀬マンカイ」でも、様々な場面で八月踊りが行われています。

み八月に行われる八月踊りの儀礼性は、シマの家々を巡って行われる「ヤマワリ」にも見ることができます。ヤマワリは、シマの道々や家々を祓い浄め、祝福するために行われるとされています。かつては全戸を巡っていましたが、現在は、全戸を巡るところは少なくなくなりました。

ヤマワリのやり方にも儀礼性が認められます。訪れた家で最初に踊る演目は「祝つけ」(笠利町)や「庭踊」(大和村)、道行きの際に歌う曲は「おぼこれ」(笠利町)や「アシナレ」(大和村)というように大抵決まっていて、これらは祓い浄めや祝福を目的とする儀礼的な演目です[4]。

ヤマワリでは「ノロ」との関係も見られます。ヤマワリをノロの家から踊り始めたり(大和村)、ヤマワリで踊り始める家をノロが占ったり(笠利町)、豊年祭においてノロが祈祷を行ってから踊り始めたりするところもあります。奄美大島南部の宇検村阿室でも、アラセツとシバサシには八月踊りが踊られますが、ヤマワリの八月踊りがノロ宅やノロが祭りを行うアシャゲを巡っています。

そのほか、八月踊りは盆から豊年祭までの間とドンガ以外は踊ってはいけないと踊る期間が限定されていたり(大和村)、盆の送りの後の八月踊りは「グシャンチュ」(精霊)や「オワフジィ」(先祖)と「ギイス」(人間)「ギスヌックワ」(現世の人)の踊り比べといわれたり(瀬戸内町)といったことも、一種の儀礼性の現れといえるでしょう。

8. もうひとつの八月踊り

奄美出身の民俗学者である恵原義盛さんは、自らの子供の頃の八月踊りの体験を次のように述べています。

「子供の頃」に「最も待ち焦がれたのが八月の節」で、「八月踊りがあることが何よりの楽しみ」だった。「サキザレの火が高倉の前を通るとき、私の家では「あ！やってきたぞ！」と色めきたつ」。「家の中では「それ酒の用意、それハナの用意」と大わらわ」で、「母は「芋の葉の露」と称する曲が好み」だが、「彼等は」「要望もしないのにその曲を打ち出」す。八月踊りは「経験のある者ならどんな娯楽にも味わえない恍惚境ともいうべき楽しさ」があり、「季節の訪れによって潜在意識の郷愁が呼び覚まされ」、「八月踊りの恍惚境に浸りたい衝動で参加する」(恵原 1982:298-299)。

この文章は、八月踊りの理解を巡って、先に見たような定義や分布や芸態や儀礼性など

とは性格の異なる問題が存在していることを気付かせてくれます。それは、八月踊りを実際に踊ってきたシマの方々が、八月踊りをどのように認識し、どのような思いで踊ってきたか、当事者の八月踊りに対する理解や認識という問題です。わたしたちは、この点も、映像取材や番組制作の重要なポイントになると考えました。

こうした点への注目は、かつて柳田国男が主張した「郷土研究」の考え方に通じます。柳田は郷土研究を、「郷土を研究しようとして居たので無く、郷土で或ものを研究しようとして居」て、「その「或もの」とは」「日本人の生活、殊にこの民族の一段としての過去の経歴」であり、「それを各自の郷土に於て、もしくは郷土人の意識感覚を透して、新たに学び識らうとするのが我々どもの計画であつた」(柳田 1970a:67)と述べています。つまり郷土研究とは、地域の人々の生活意識や生活感覚を通して、地域の歴史や文化や生活のありようを解明することというわけです。当時柳田は、民俗学を郷土研究と呼んでいました。従って、こうした柳田の郷土研究の主張は、本来民俗学が目指した視角だったといえます。

柳田は民俗学の資料を、目で見ることができる生活の様相の「体碑」、耳で聞くことができる言葉の「口碑」、心で感じる生活意識や感覚の「心碑」の三つに分類し、その中でも心碑が最も重要と位置付けました。当事者の八月踊りに対する理解や意識は、まさに心碑に当たります。但し、心碑の理解は外から調査に訪れた者にとっては容易ではなく、柳田も「郷土人の感覚・同郷同国人でなければ理解の出来ぬ部分」(柳田 1980)であると述べています。しかし、容易ではないから無視してもいいということにはなりません。対象を実際に担っている現地の人々の理解や意識と全く無関係に、対象の理解を行うことが十分でないのは明らかです。八月踊りに関しても、それぞれのシマの方々が、どのような意識や感覚を抱いて踊ってきたかに十分に注意を払う必要があるはずです。

そうした考えから、私たちは各地のシマの方々から八月踊りに関する話を伺い、その中の何人かの話を番組の中で紹介しています。しかし、問題はそれで片付きません。そもそも、シマの外の人間である私たちが、八月踊りについて映像取材や番組制作を行うことが果たして可能なのか、あるいはどのような意味があるのかといった問題が依然として残るからです。その点をどう考えればいいのでしょうか。

9．郷土研究の落とし穴

柳田国男は、郷土研究における郷土の人々の視点や主体性の重要さを強く主張する一方で、郷土研究が陥りやすい落とし穴を次のように指摘しています。

郷土で郷土研究を行う人々が「陥りやすい速断」は、対象が「自分の土地にしかないと、珍しさを強調」すること、また、反対にそれが「ありふれた世間並と思って、注意を怠る」ことである。「郷土研究がそれぞれの郷土の人々によってなされなければならぬといふことは」、「単に各地の区画的分担を必要とすることを意味するばかりで、孤立してはその効を奏し得ぬ」というわけです(柳田 1970b:291)。

ここでは柳田は、郷土で郷土のことを考える場合、ものの見方が狭くなりがちで、その

結果、理解や認識がお国自慢的になったり注意不足になったりして不十分なものになってしまう。それを克服し、よりよく郷土のことを理解し認識するためには、自らの郷土以外の地域の様相や、郷土以外の人々の見方や考え方との比較や参照が不可欠であると指摘しています。

こうした柳田の考えに従えば、私たちの映像取材や番組制作は、シマの外からの八月踊りに対するひとつの見方を提示することで、それぞれのシマの方々に、自らが踊ってきた八月踊りをよりよく理解し認識するための比較や参照の機会を提供することになるのではないでしょうか。

10. よりよい八月踊りの理解を目指して

私たちの映像取材や番組制作は、「八月踊りはこうである」といった定説的な理解を作り上げようとするものではありません。様々な立場から様々な理解の可能性がある中で、ひとつの見方を示しているに過ぎないということは、強調してもし過ぎることはありません。シマの方々の見方にせよ、シマの外からの私たちの見方にせよ、何れにしても目指されるべきは、最終的にはよりよい八月踊りの理解ということになります。

それでは、八月踊りのような、地域の人々によって行われ、伝えられてきた物事のよりよい理解とは、果たしてどのようなものでしょうか。そしてそれは、どのように可能でしょうか。これはなかなか難問で、今の私にもきちんと答えることはできませんが、常々考えていることならば幾つかあります。

例えば、地域内外の様々な立場の多くの人々の声が十分に反映された結果であること、それに接することで、地域の人々が自らの生活や歴史や文化を改めて考える契機となると共に、地域内外の様々な立場の人々の考えや意見が交わされる契機となること、そして更に、将来地域の人々が、過去を顧み、地域の歴史を自ら考える材料となることといったところです。

それは、柳田国男が述べている「郷土誌」に近いといえるかも知れません。柳田は、「郷土誌は、個々の郷土が如何にして今日有るを致したか、又如何なる拘束と進路とを持ち如何なる条件の上に存立して居るかを明らかにし、其志ある者をして此材料に基いて、どうすれば今後村が幸福に存続して行かれるかを覚らしむるやうに、便宜を与えなければならない」と述べています(柳田 1970b:9)。つまり、郷土誌とは、単に地域の人々の生活や歴史を記した書物ではなく、地域の人々の生活や歴史を記すと共に、地域の人々が、将来的によりよい生活を実現する契機となる書物であるべきだというわけです。

それを八月踊りに即して言い換えれば、シマの方々が、自らの八月踊りをどのように行い、どのように伝承してきたかを示すと共に、シマの方々が自らにとってよりよい八月踊りを将来如何に実現するかに繋がるような、八月踊りの「郷土誌」ということになるかと思います。

そんな柳田がいうところの郷土誌に少しでも近づくように、私たちは、皆さんにこれか

ら見ていただく番組を作ったつもりです。果たして出来はどうでしょうか。実際にご覧いただいた後で、忌憚のないご意見をいただければと思います。

---

1 以下、暦や年中行事の時期は、基本的に旧暦である。
2 奄美大島では、集落を「シマ」と呼んでいる。以下、「シマ」と表記した場合は集落を指すものとする。
3 奄美市笠利町宇宿に伝わる何冊かの八月踊りの歌集において、掲載された歌詞は、最大268であるという(内田・久万田 1995)。また、小川学夫によれば、奄美民謡は一説に150曲3000種存在するという(小川 1974:165)。
4 歌に関わる儀礼性ということでは、瀬戸内町油井で、八月踊りのミャー踊りの歌は神に捧げる歌とされていて、ミャーでの踊り全体が儀礼性を帯びる場合もあることがわかる。

文　献

内田敦・久万田晋 1995「笠利町宇宿の八月踊り－概観と歌詞の局面から－」『沖縄芸術の科学』8 75-180
内田るり子 1981「「八月踊り」の地域性－「でっしょ」をめぐって－」『人類科学第33集 奄美 その5』九学会連合 pp. 1-39
内田るり子 1983『奄美民謡とその周辺』雄山閣出版
恵原義盛 1982「奄美の八月踊り－その形態と発生のことども－」田中義広編『奄美のまつりと芸能』錦正社 pp. 298-315
小川学夫 1974「民俗芸能－民謡－」長澤和俊編『奄美文化誌 南島の歴史と民俗』西日本新聞社 pp. 162-168
小川学夫 1979『奄美民謡誌』法政大学出版局
小川学夫 1989『歌謡(うた)の民俗 奄美の歌掛け』雄山閣出版
小野重郎 1995『南日本の民俗文化Ⅶ 改定南島歌謡／琉球歳時記他』第一書房
久万田晋 1991「奄美大島笠利町城前田の八月踊り歌」『沖縄芸術の科学』4 1-101
久万田晋 1995「八月踊り研究の現在－松原武実説を検討する－」『奄美沖縄民間文芸研究』18 13-28
笹原亮二 2006「海南「極」小記」『民博通信』114 29-32
中原ゆかり 1997『奄美の「シマの歌」』弘文堂
本田安次 1991『沖縄の祭りと芸能』第一書房
松原武実 1993「奄美八月踊の二つの様式」『奄美学術調査記念論文集』鹿児島短期大学南日本文化研究所 pp. 47-53
三隅治雄 1976『芸能史の民俗的研究』東京堂出版
柳田国男 1970a『定本柳田国男集 第24巻』筑摩書房
柳田国男 1970b『定本柳田国男集 第25巻』筑摩書房
柳田国男 1980『民間伝承論』伝統と現代社